

キーウィの国にて

法学部 西谷 元

“Mr. Nishitani, how is this issue dealt in Japan?”

指導教官の突然の質問に私は絶句してしまいました。ここは、ニュージーランドのオークランド大学、法学部の憲法のチュートリアル (tutorial) (授業と並行して演習形式で行うゼミのようなもので、全員必修で授業と同じく一コマ50分)。ニュージーランド、英国、オーストラリア、カナダの比較憲法ともいえるこの授業は、予習する判例の数、分量も多くなかなか大変な授業でしたが、週末を完全に予習のために費やし、チュートリアルの最初の質問もなんとか答えることもできほっとしていた私は、そのとき他のことを考えている最中でした。そこはよくしたもので、英語がよくわからないふりをして質問を聞きなおし、なんとかその場を切り抜けることができました。

しかし、この経験も、オークランド大学で数か月を過ごしてなんとか授業について行けるようになってからのことです。文科系の授業、特に私が留学した法学部の授業は、先生によってはソクラテス式問答法 (the Socratic method) という質問によって授業を組み立てる方法か (「ペーパー・チェイス (Paper Chase)」という映画を見たことがありますか) 講義で、板書も少なく判例の固有名詞、引用が多くて、中途半端な英語力 (TOFEL, 550-560くらいだったと思います) では、授業の大意をなんとかつかむだけに終わってしまっ、て、細部の議論などはどうも理解の範囲を超えていました。教室にいるニュージーランド人の学生は、ノートに4、5ページとるのに対して、私のはほんの半ページ。それ

も重要な部分ではなく、聞き取れたところを書き留めただけというていたらくでした。広島大学で修士をしていたとしても、留学一年目に履修した憲法、法制度などの、私の専門である国際法とは離れた授業では、日本で得た知識 (より正確には私が覚えていた知識) などのごく基本的なもので、すぐに種切れになってしまいました。

このような情けない状況でしたが、2年目に修士課程に編入しようと思っていましたので、できる限り予習復習をし、週末はもちろんのこと、夜も12時近くまでは大学の図書館にこもる毎日でした。そのため住んでいた学寮の夕食には間に合わず、しばしば一人で冷たくなった食事を夜遅く食べたので、学寮の食事にはあまりいい印象をもてませんでした。このように頑張ったのですが、アサイメントは膨大ですし、授業での聞き取り能力もそう急には上がりません。そこで、ある日、授業を聴くのはほどほどにして、賢そうな顔をしてたくさん授業ノートをとってほしい人を探し、授業の後でその人に頼んでノートを貸してくれるよう頼みました。幸運にもすべての授業で私のかかなり厚かましいお願いを聞きとげてくれる人が現れ (残念ながらすべてむくつけき男ばかりでしたが)、その後はこの授業ノートを基礎にしなが、ら、自分の授業ノート (最後まであまり役にたちませんでした) が、予習でつくった判例ノート等をあわせて勉強を続けたわけでは、す。

このように、勉強に邁進しているうちに (実際にはパーティー、旅行など楽しいこともたくさんありましたが)、あっという間に11月の最終試験の時期になりました。試験はすべ

て筆記式で、科目によっては持ち込み可の試験 (open exam) もありました。試験は3時間で、その前に15分間の問題を読む時間が与えられます。ここでも読解の速度の差がでて、私がA4、4ページ分の判例の引用を読み終わる頃には2時間が過ぎており、回りではニュージーランド人の学生がサラサラと答案を書いていますし、10枚の答案用紙が足りなくなつて次の綴をもらっている人もいました。試験結果は、12月の半ばには大学で公示されますが、必死で勉強した結果と多分の幸運にも恵まれて、かなりの成績で単位をとり、2年目は修士課程に進学することができました。修士は、論文のみでとる方法、授業のみでとる方法、2つの組み合わせなどいろいろな取得方法がありました。私は英語力、将来の研究のことも考え、論文を書くことにしました。パニックの一年目がすんだ後では、論文の展開、コンピューターの不調、締切などいろいろ苦しいこともありました。2、3年目はそれほどではなく、1984年には口頭試験も無事済まして学位をとることができ、やっと日本へ帰ることができました。卒業式 (Capping) で、オークランドの目抜き通りを行進したことは今でも楽しく思い出します。



文科系のそれも法律という限られた範囲で留学により得られた私の経験からいえることは、できる限り英語を、それも総合的な英語力を日本で身につけていくということです。聞き取りはもちろんのこと、授業では発言するための会話力、準備のための読解力それにもまして速読力、たくさん課される小論文 (essay) のための書く力などが要求されます。これらはもちろん留学してから身につけることもできますし、そうせざるを得ないわけですが、そうすることは、必然に他のことを学び、また楽しむ時間を、限られた留学期間より削り取っているわけです。また、このことは、上に述べた英語力のことも関連するわけですが、留学においては、日本では学ぶことのできない、またはそうすることの難しい分野を勉強していただきたいと思うわけです。みなさんはすべて (例外がおられるかもしれませんが)、英語より日本語の方が得意なわけですので、学ぶ内容のことを考えますと日本語を使って日本で勉強した方が能率的なわけですから、日本で行って勉強するのですから、日本で得ることのできない知識、方法論などを学んで帰ってきてほしいと思います。留学は、確かに勉学のことのみを考えるとつらいものですが、もちろんそれだけではなく楽しい経験もたくさんあります。ただし、そのような体験もただ座していれば向こうからやってくるというものではありません。若い間にどん欲にすべてのことに挑戦するという心構えをもつことが、たくさんの楽しい思い出を生み、また、ひいては実り多い留学成果に結実することでしょう。Auckland, Queens St. (広島でいうならば八丁堀と紙屋町の間) の通り) での、全学生による卒業式のための行進